

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	萬物の流轉：文苑
Author(s)	河崎，三郎
Citation	龍南， 1 7 7： 1 4 4 - 1 4 8
Issue date	1921-03-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7776
Right	

萬物の流轉

河 崎 三 郎

われらは不完全の上に立つてゐる。われらも不完全だ。萬物が不完全だ。完全なものは一つも存在してゐない。何故萬物が不完全で存在してゐるかは、われらは知らない。けれども、不完全なものへが、より完全なものへ、或はより不完全なものへ絶えず變つてゐることを知つてゐる。されど不完全は常に、如何に變化するも、つひに完全となる能はざるか、或は、完全となり得るやに至りては知ることが出来ない。

兎に角、萬物は不完全ながら流轉しつゝある。而して人は自ら流轉しつゝ此の流轉にある程度まで干渉することが出来る、そして不完全なものを完全なものへ改變しやうとする希望をすてす不斷の努力を拂つてゐる。

萬物が不完全だ。故に事實も不完全だ。事實とはわれらの感覺により感じ得る現象だ。完全性、無限性は我等は事實として感ずることは出来ない。われらの感覺は直接われらに完全性、無限性を示してくれない。けれども、われらは完全性無限性の存在し得ることを信じてゐる。何となれば信じてゐるから、不完全と云ふ概念があるのだ、之われらに、感覺以外悟性のあることを證するものがある。

悟性はわれらに、錯綜せる現象の中に、統一と法則を抽象して呉れる、事實と直接交渉をなしつゝも、事實の後ろにある眞理を見極め得る所以は悟性があるからだ。

悟性は神のものだ、極く些少ではあるがその一

部分を我等は神より授かつてゐる、(高等動物にも更に極少の悟性を認める)

感覺は神のものではない、植物や下等動物は、感覺のみを有してゐる、従つて彼等の生活は事實との接觸のみによりて行はれる、

元よりわれらの有する悟性たるや甚だ不完全なものだ、悟性によりて支持される科學は人類のみ有する寶物だ、併し科學はあまりに多くの誤謬を作りつゝある、今日永久の眞理だと思つたものが百年たち二百年たつうちに、誤謬となつてくる、われらの歴史は誤謬の連續である。しかし注意せよ。昨日の誤謬より今日の誤謬はより眞理に近いものだ、尠くとも人類は再びその誤謬を繰返さない。更に注目すべきことは、人類がかかる誤謬の製造所たる科學の殿堂を棄てやうとはしない、ことである、眞理の追究を一日として止めないことである。茲に人類の偉大さがあるのだ。

盲昧なる人類は左に曲り右に折れ壁に突き當り溝に落入つてゐる、落入つてはじめて溝のあつたことに氣付くのだ。

山谷の小川は岩に堰かれ、岳に遮げられ大海の何處にあるやを知らないけれども遂に大海のものとなる。之水の低きにつくてふ、絶体性を有すが故である。

人は眞面目に嚴肅なるとき、眞理につくてふ絶体性を有してゐる、私は此を善惡の例にとることが出来る、人は絶体惡たりねない、眞に嚴肅に惡人たり得たる人ありや、岩にせかるゝ水は、逆流するかもしれない。けれども水より低きにつくてふ絶体性を奪ふことは出来ない。

成程美人と目すべき人より惡人と見做すべき人が多いかも知れない、けれども人眞面目なるときはすべて善人である。人惡につくとき、それは不眞面である。を自覺しないものは一人もない。畑に種子を蒔く農夫がよしその蒔ける種子の芽を出し果を結ぶもの、その十分の一に足らずと雖も、種子はすべて芽を出し果を結び得るものなりとの眞理を、否定し得ない。之農夫の自らの耕作の不眞面にして不充かなるを自覺し、又は種子の成長に他の障害のあるによるものにして、種子そのもの

に罪のあらざるを知るが故である。

人はすべて善人たりうるものなりとの眞理は、
 尠くとも人には否定できない。何となれば人は眞
 面目に嚴肅なる惡人たり得ないからである。

かくして人は不完全、誤謬の中に埋もれつゝも
 なほ且萬物の流動に桿して、善と眞との彼岸を指
 すを忘れない。

而らば人の生存の意義及價值は自ら明である、
 生存とは抑々如何なる現象なるや、生存作用は、
 生命を中心とする生活体によりて行はるものである
 生活体は糧の吸収によりて生存する、この間の
 有機的作用が生存である。

生存作用

而してこの有機作用を誘發するものは、生活体の
 慾望である。生活体とは、過去の

生存作用

即ち過去の生存作用の總和である、故に生活体の
 即生物の價值を最高たらしめるには、生命なるも
 のが變ずべからざるものたるを以て、糧をして最
 も純化せしめ、美化せしむるに在る外はない。

故に生存の意義の問題は糧の問題となる、

生活体の固定され悟性を有せざる植物及下等動物
 は、糧となるべきものを含む事實の來るを待つ
 みである、ある事實が有害なるとも之を避ける
 が出來ない、己の欲する事實を撰擇するとも出
 來ない。かゝる生物は糧の來りて己れに供給する
 を待つのみである、而るに糧には有害なるものと、生
 存價值を高めるものとある、更に人類及其他の
 高等動物は肉躰的糧の外に更に精神的糧を必要と
 する、かゝる人類を中心とする高等動物は、智力
 と意志を有して、錯綜せる現象事實の中より統一
 を法則と驗證とを抽象して、事實を單なる事實と
 して受容せず、統一法則經驗の下に従屬せしめ、
 之を意識し取捨撰擇して糧と爲やうとする、即ち
 糧の吸収作用に於て、糧となるべき事實の來り供
 給するを待つ以外、更に積極的に、取捨撰擇しや
 うとする、而して或程度まで神より獨立して爲し
 得るのだ、それだけ、その取捨撰擇に責任ある譯
 だ、同じくAなる糧を吸収するにしても、植物と
 人類とは、責任、價值を異にする。一は無意識に

なし一は有意識的になす。恰も善惡をなすに於ても、同じき善行、同じき惡行をなすも、行爲者が小兒なるときと、分別ある大人なるにより、價值責任を異にする、と同斷である。

意識を有せざる小兒白痴が道德價值評價の對象となり得ざるが如く、植物、下等動物、（私は人類を除く、殆んど動物と云してもよい）には、生存價值の評價の對象と殆んどならない。

而して、糧の取捨撰擇に最も自由にして、生存價值を最も高め得又生存價值を最も低下しうる人類に於てはことに、この問題が重大となる、銳利なる刃物は、最美の藝術品を作り出すと同時に、人を殺すの器ともなり得るにより、銳利なる刃物の使用は重大となる。

己に糧の取捨が、人生自らの價值を決定する以上。人生の意義は、糧の純美化にある。と云つても過言ではなからう。

糧は人生に於て精神的糧と肉体的糧とに分れる前者を有することは、神の觀念を有する人間の特權である、前者は神性的慾求に起り後者は獸性的

慾求に起る。故に前者の重視すべきに反し後者は或る程度即ち肉體維持に必要以上は害あつて益がない。しかのみならず過重なる肉體的糧の追及起るときは、精神的糧の追及は輕視さるゝの關係にある。その時人は神に遠かり獸に近付く。故に兩者は重要さに於て、對立せず、肉體的糧は、精神的糧の追求に欠ぐべからざるが故に必要なものにして、寧ろ從屬すべきもつである、一は絶體的價值を有するに反し一は相對的價值を有するに止るだからと言つて、後者の價值の否定とはならない否或る程度までは、後者は前者と等しく絶體的價值を有する。何となれば、後者の全然否定は生存の否定となるからだ、たゞある程度を超ゆるとき前者を害ふが故に、否定さるべきものである。恰度正義人道は絶體的價值を有するに反し國家（在來の國家と言はず、寧ろ社會と云ふが適當かも知れない）の價值は相對的である。けれども國家存亡の秋に當りては何よりも正義人道は措いても國家の存續は必要である。即ち此の場合價值は轉倒する。何となれば、われらは國家なくして正義人

道の追及を想像することが出来ないから。

故にかくのごとき場合に於て肉体又は國家の有する（一時的に）絶体價値は、肉體又は國家が本質的に有するのではない。たゞ手段なる肉體又は國家の滅亡が同時に絶体價値を有する、目的たる精神、又は正義人道の破滅を誘致するからだ、手段はその價値に於て目的に及ばざるも、手段の死活が同時に目的の死活を意味するとき、目的と價値を等しくする。

故に、いやしくも、生存の權利を有する生物は生存を維持するに充分なる糧を得べき權利をも有

する。勿論得べき方法は正善なるものでなくてはならぬ。

人が正善なる方法により肉體的糧を得るため、全精力を費さざるべからざるとき、又は全精力を盡してなほ且必要だけの糧を得られざるとき、之を得んとする努力は絶体に正しい。

編者附記。本篇は「才能公有の提唱」を題する論文の前半である

が、後半は、事、社會問題に關し、その筋の忌諱に觸れる怖れがあるので遺憾ながら、削除するのやむなきに至つた。茲に附記して作者の御寛恕を乞ひ度い。